



Watch!

統計から社会の実情を読み取る

第21回 晴耕雨読の地はどこに

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学株主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。(財)国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、「統計データはためになる!」(技術評論社、2012年)等。



日本の中で読書とガーデニングがさかんな地域はどこか

日本人の生活の理想として、田園で世間のわずらわしさを離れて、心穏やかに、晴れた日には田畠を耕し、雨の日には家で読書するという「晴耕雨読」が挙げられる場合がある。

晴耕雨読で暮らしている人の比率を示すデータはないが、総務省統計局が行っている社会生活基本調査では、過去1年間にガーデニング(園芸を含む)や読書を行った人の比率が都道府県別に得られる。そこで、これを散布図にあらわして、「晴耕雨読の地はどこに」の手掛かりとしてみよう。

読書の比率の高い地域としては、東京、神奈川が目立っており、ガーデニングのさかんな地域としては、奈良、長野が目立っている。

読書の比率の高い地域には東京、神奈川の他、奈良、千葉、埼玉、宮城、兵庫と大都市地域が多い。逆に、読書の比率の低い地域には、高知、沖縄、青森、秋田、佐賀、宮崎など西南地域と東北地域が多くなっている。

一方、ガーデニングの比率の高い地域には奈良、長野の他、山口、群馬、山梨、栃木などが見られる。ガーデニングの比率の低い地域としては、沖縄が目立っており、それに大阪、東京、京都、福岡など大都市地域が続いている。

読書とガーデニングの間に明確な関係はないようである。奈良のようにどちらも多い県もあれば、東京のように読書が多くガーデニングが少ない地域もあれば、沖縄のようにどちらも少ない県、栃木のようにガーデニングが多いが読書は少ない県もある。

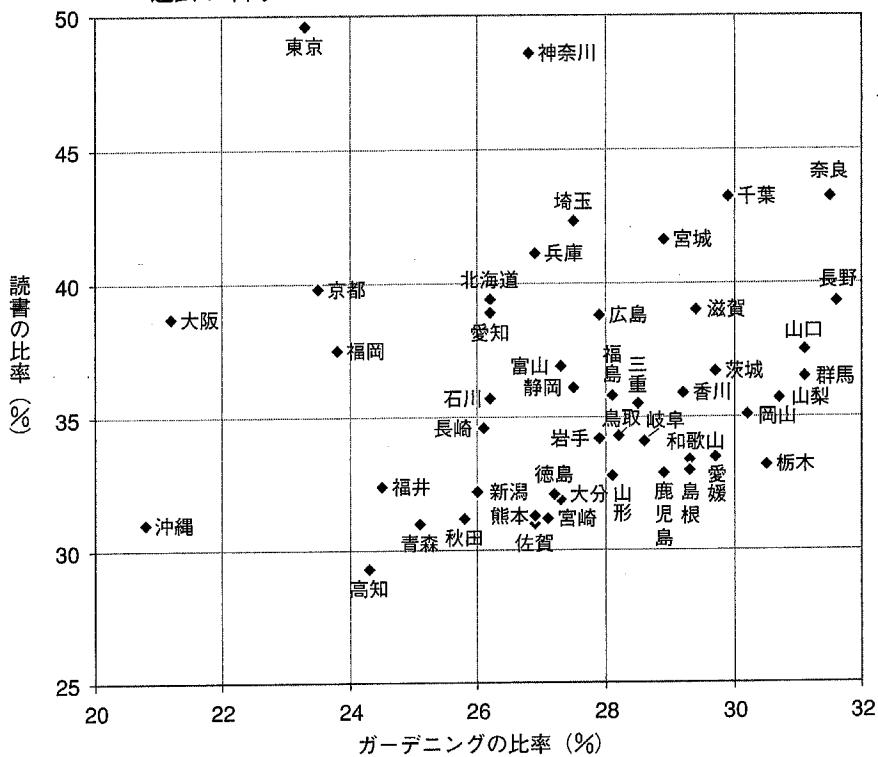
晴耕雨読をガーデニングも読書も多いことだとすると奈良こそが「晴耕雨読」県といえるであろう。奈良に近い県として、千葉や長野を挙げることもできよう。

季節を告げる生き物たち

四季のはっきりした風土の中で、日本人は古くから花や紅葉、鳥の鳴き声、昆虫の飛来など、自分たちを取り巻く生き物の動向で季節の到来を感じてきた。晴耕雨読の生活では、季節の移

図1 都道府県の晴耕雨読

過去1年間にガーデニングや読書を行った人の比率（2011年）



注) X軸は「園芸・庭いじり・ガーデニング」、Y軸は「趣味としての読書」の行動者率（10歳以上）。

資料) 総務省統計局「社会生活基本調査」

り変わりになおさら敏感となろう。

季節を告げる生き物の動きを観測することを「生物季節観測」というが、明治時代からの取り組みを受けて、気象庁では1953年に指針を制定し、全国規模で統一基準のもとに生物季節観測を開始した。現在、59地点ある観測地点のそれぞれで何を観測しているかは異なるが、植物34種、動物23種、合計57種の生き物の動向が観測されている。サクラは59地点全てで観測されているが、これに次いで、ヤマツツジ、モンシロチョウ、ウグイスがそれぞれ56、53、52地点で観測されている。

図2には、主な生き物に関する生物季節観測について、1981年から2010年までの那覇、名古屋、東京、札幌での平年値、すなわち、毎年の観測結果の平均値を示した。エクセルによっ

てこのようなグラフ化も可能だという点が参考になればと思う。

東京で春を告げる生き物としては、かなり早く1月26日にウメが開花、ツバキ開花の2月9日を経て、3月6日にはウグイスが鳴く。そして春本番を告げるサクラの開花が3月26日に年度始めの入学式に先立って見られる。

その後、いわゆる五月病（受験戦争を切り抜けて入学した学生の虚脱感）の時期には4月21日に開花したツツジが満開となる。

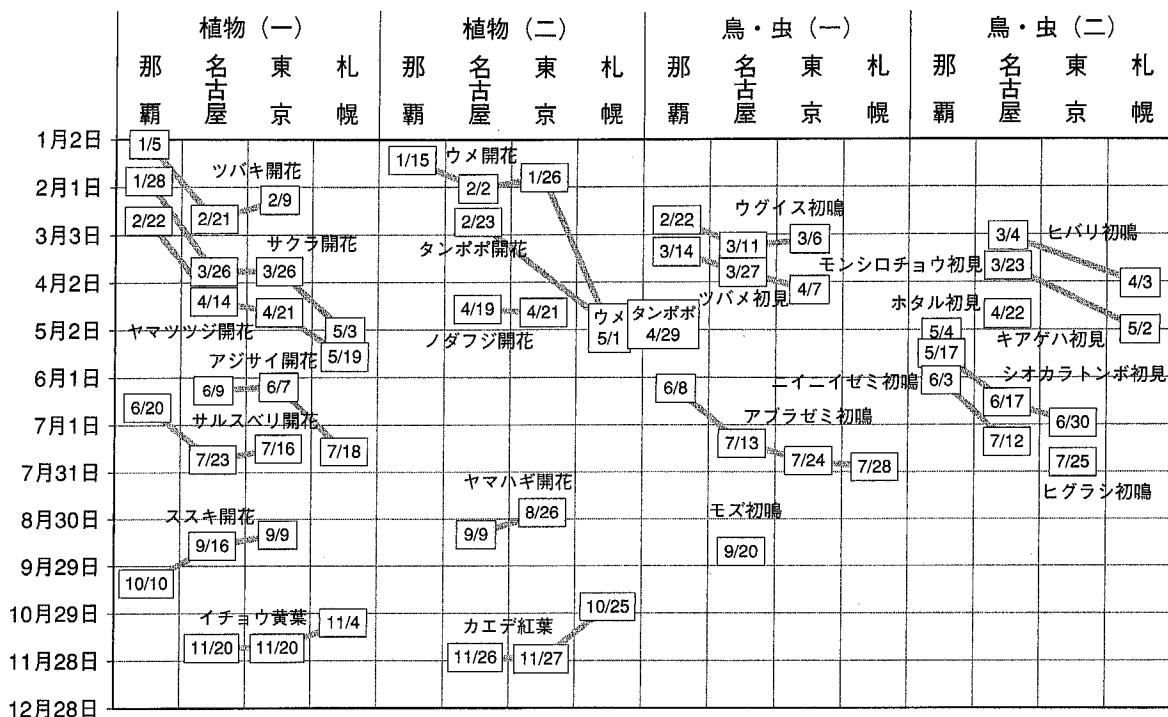
梅雨に入るとアジサイが咲く（6月7日開花）。

夏を告げるのは何といってもセミの鳴き声。ニイニイゼミに続いてアブラゼミが鳴き始め（7月24日）、遅れてヒグラシが7月25日に鳴き始める。

9月9日にはススキの開花。秋が深まってイ

図2 季節を告げる生き物たち

各地の平年値（月／日）



注) データは気象庁による。1981～2010年の30年間の平均値。8回以上観測値があるものについて算出。

資料) 東京新聞大図解「季節を告げる生き物たち」(2013年2月17日)

チョウが11月20日に黄葉し、カエデも11月27日に紅葉する。紅葉した木々の葉っぱが散ると冬である。

以上、東京での例を示したが、春や夏の訪れは、南の地が早く、北の地が遅く、また秋の訪れは、北の地が早く、南の地が遅いことは、それぞれを示す生物季節観測の地域別の結果が、図上で右下がり、あるいは右上がりとなっていることから視覚的にうかがえる。

世界の中で読書とガーデニングがさかんな地域はどこか

「われもまたかつてアルカディアにありき」という有名な言葉があり、ゲーテのイタリア紀行の副題にもなっている。アルカディアはギリシャのペロポネソス半島にある地名であり、古代ギリシャ人にとって失われた都市集住前の生

活を連想させる伝説の地であった。田園における牧人生活の理想は、ヨーロッパ人にとっても馴染み深いものなのである。

参考までに、欧米諸国の晴耕雨読の状態についても、前掲の図1と同様のグラフを作成した。データは都道府県のような過去1年間の行動者率ではなく、読書やガーデニングを行わなかつた人も含めた調査日における一日平均の行動時間である。

欧米諸国の中では、ガーデニングがさかんな国は、ブルガリア、スロベニアであり、読書がさかんな国は米国、エストニアである。やや意外であるが、米国人は読書好きなのだ。しかし、両方ともがバランスよくさかんな国は見あたらないようだ。日本の位置はというと、欧米諸国と比較して、読書もガーデニングもそれほどさかんではないという結果となっている。

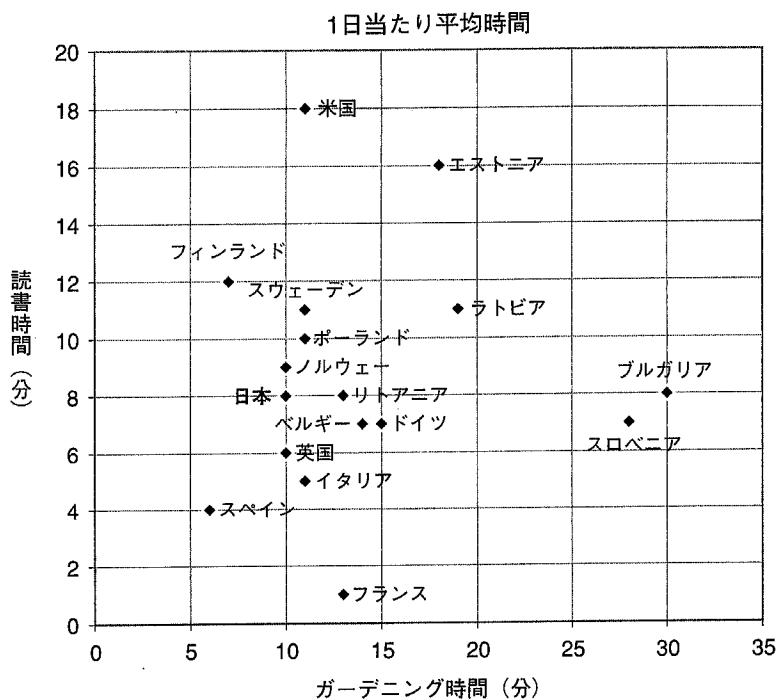
対象国の中で、読書もガーデニングも余り関心がないことで目立っているのはスペインである。沖縄はスペインと似ているといえよう。

フランスはガーデニングはそこまであるが、読書はヨーロッパで最も時間が短い。そうした意味では、高知はフランスと似ているのかも知れない。フランスは文化国なので読書時間も長いはずだという考えは、データで反証されたかたちである。また、英国はガーデニングの国として有名であるが、国民の参加時間からいえば特に目立ってはいない。

ブルガリア、スロベニア、ラトビア、エストニアといった欧州の中でも旧共産圏の諸国でガーデニング時間が長いのは、食料調達を自家菜園でも行う者が多いためという可能性もある。旧共産圏諸国を除くと、ドイツのガーデニング時間が一番長いことに注目すべきなのかも知れない。ドイツには、都市の周辺部の公共用地をクラインガルテン（小さな庭）という名の市民農園として永続的に貸し出す制度があることで知られている。これは、かつては都市住民の重要な食料自給手段として機能した名残りなのである。

読書時間は、米国を除くと、長い方からエストニア、フィンランド、スウェーデンと続いているように、寒い国で長く、逆に、短い方からフランス、スペイン、イタリアと続いているように、暖かい地中海沿岸諸国で短いことが分かる。蔵書数のデータでも、同様の結果が得られており（[1] 参照）、寒いから室内での読書に樂

図3 晴耕雨読の国際比較



注) EUは1998～2006年各国生活時間調査。20～74歳の集計結果。日本は2006年、15歳以上の結果。米国は2011年、15歳以上の結果であり、ガーデニングには芝生刈りを含む。また読書はWeekdaysとWeekendの結果から5対2のウェイトで加重平均した。

資料) EU: Harmonised European Time Use Survey HP
日本: 総務省統計局「社会生活基本調査」
米国: 米国労働省「AMERICAN TIME USE SURVEY」

しみを見出すのであり、暖かければ野外で楽しむことを優先するという気風がヨーロッパにはあるのだと考えられよう。

これらを総合すると、晴耕雨読の理想は、儒教国としての歴史をもつ日本人の考え方の特徴であり、欧米には、読書と耕作をむすびつける考え方は、そもそもないといえるのではないだろうか。すなわち、どこか知らない場所に晴耕雨読の地があると考えること自体が間違いというのが結論である。

* 「社会実情データ図録」関連図録
[1] 図録3956a「家庭の蔵書数の国際比較」